

山と博物館

第40巻 第9号 1995年9月25日

大町山岳博物館



朝の杓子尾根 撮影 平瀬 貴志

北アルプス讃歌

船山 桑治

近年の登山ブームは全く驚きの一言に尽きる。特にここ信州の屋根、いや日本の屋根ともいえる北アルプスは、老若男女を問わず競って登ってくる。その遙かなる稜線にあこがれて。

稜線に立った瞬間多くの登山者は、感嘆の声を発することだろう。

そしてこの感激は、人それぞれ違った感性で見つめていることだろう。

山岳写真愛好者は夢中でシャッターを切っている。そしてその時の映像は個人により違ってくるのは当然である。自分の感性を山岳写真の中にとこまで表現して行けるかが課題になるのではないだろうか。そして作者の個性ある映像を発表する。

クラブの写真展の醍醐味は、このような所に發揮できるのではなからうか。

この度、大町山岳博物館で写真展を開催することができた。この事業がこれからの作品づくりの励みとなることは確実である。

その作品の中から、風の音が聞こえ、太陽の輝きなどを感じとって頂ければ幸いである。

付記・日本山岳写真協会松本支部の創立は約四十年の歴史を持ち現在四十二名の会員で構成しています。

(日本山岳写真協会松本支部長)

『北アルプス讃歌』

—日本山岳写真協会松本支部展—

9月1日(金)～9月17日(日)まで開催

ツキノワグマの保護と実践

米田 一彦

1 西中国での調査を始める

近畿圏以西では、ツキノワグマ個体群は（以後クマと称する）各所で孤立し南の方から絶滅地域が確実に広がっている。

九州では戦前すでに絶滅状態にあり、一九八七年十二月に三八年ぶりに大分県でクマが射殺されたが、生息は既に絶望的だとする意見が多く、生息の確認も無い。

四国では、戦後の森林開発から個体数が減少し、それにつれ植林へ皮はぎが発生し、駆除に多額の補助金がついてから急速に減少した。徳島県の剣山地を中心に、生息数が二・三〇頭と推測され、私は現在この地域で三頭のオスグマを追跡中だ。

紀伊半島では、三県にまたがる地域で、生息数が一五〇頭と推測されている。

東中国地域では、氷ノ山を中心、二〇〇頭前後が生息すると推定されている。

西中国のクマの棲息が衰退した理由は分からない点が多い。事実は次の四つである。

西中国では①ここ一〇一五年の間に集落へ出るようになった。②それまで山奥で少数発見されるだけだった。③昭和三〇年代に拡大造林が盛んになった。④昭和四〇年代から過疎が進行した。西中国地方は古来から戦前までタタラ精錬が盛んで、木炭が大量に必要なため、広葉樹の再生産は行なわれて来た経緯があり、広葉樹は残っていた。

まず一段階目として山奥に少数残っていたクマが戦後の拡大造林により、集落周辺に押し出された。二段階目、過疎が進み人影が少ない、生産力の大きな集落跡、廃村へ依存するクマが増え、昭和五〇年代一時繁殖が進んだ。三段階目五〇年代以降、集落とクマに軋轢が生じ、密猟、養蜂へ関わり駆除、イノシシワナにかかり捕獲などで減少して行った。

今、私は広島県芸北町を中心に、広島、島根、山口県にまたがる、西中国山地と呼ばれる地域のクマを調査しているが、そこでの生息数は三〇〇頭前後と推定されている。

本州の西南端部地域の西中国山地での分布は、東中国山地の分布と大きく離れた完全な孤立個体群となっている。残念ながら西中国地方のクマも大きな歴史的時間の流れから見ると、絶滅からは逃れられない状況だろう。

四国、中国地方など日本の南に棲むクマは、暖かくて越冬期間が短い、しない可能性もあるなど南に棲むクマが持っている特殊な生態も調べる必要がある。

西中国山地は国定公園に指定されており、比較的良好な自然林が残されている。中国地方には、低い山が多いが、標高七〇〇メートルを越えると東北地方と同じく、ブナやミズナラが出てきて森の様子が似ている。このことがクマが残った理由のひとつと思われる。

しかし標高の低い山麓では、カシ類、アセビ、シイ、アオキ、ツバキなどの常緑の植物

が多く、東北地方と全く異なる。これらの山地から流れ下る川が太田川で、この川のデルタ地帯に発達したのが広島市である。

この地域でのクマ問題の特徴は、生息数が少ないのに被害が多岐にわたり、有害駆除が確実に進行する悪循環に陥っていることだ。

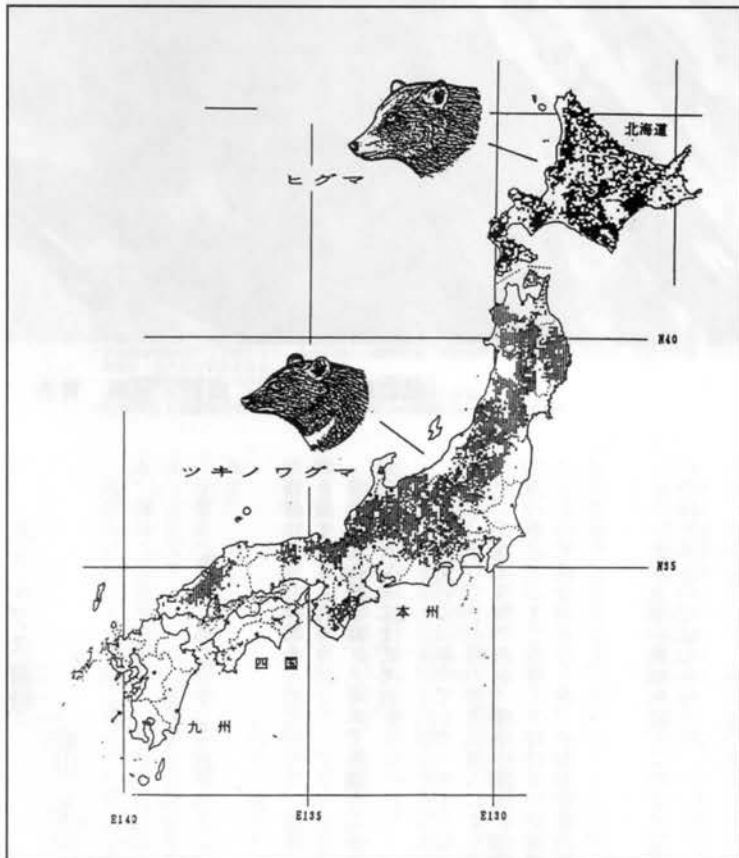
広島県では、果樹、畑、残飯に被害が多く、クマと住民生活が密着した状態だ。島根県では養蜂被害や、人家に寄生したスズメバチ類、ニホンミツバチを襲うことによる人家破壊の被害が多い。また西中国ではイノシシの有害駆除、狩猟にワイヤートラップが用いられており、錯誤で多数のクマが捕獲され、ヤミで

処理されて来たと推定されている。

環境庁では、絶滅の恐れがある上、被害も深刻な西中国での保護策を探るために、九〇年から「野生鳥獣による農林産物被害防止等を目的とした個体群管理手法及び防止技術に関する研究」と題し、調査を開始した。

2 広島県で、人々の苦しみを知る

九〇年八月、広島、島根県での調査を開始した。近隣の町村を回ると、人家の回りのカキやクリの木がどれもこれも例外なく盆栽のように枝が短くなり、クマ棚ができています。果樹がない春先と晩秋には民家の残飯を漁



ツキノワグマ・ヒグマの分布域（第2回自然環境保全基礎調査結果より）

るクマ。養鶏場の屋根を破りイタチのまねごとをしてニワトリを食べるクマ。秋には人家の屋根を歩き、カキを食むクマ。養豚場の飼料サイロのレバーを自分で操作して食べ、ブタのように太ったクマは後で射殺され、血抜き計測で一五〇キログラムもあった。体重はもう立派にブタのそれであった。

経済の高度成長期の昭和三〇年代に都市には公害が、四〇年代に農山村に現れたのが鳥獣害だ。近年、中国地方でイノシシ、クマ、シカ、サルなどによる獣害の複合汚染地となっている。大都市の繁栄は一方で農山村の荒廃をもたらした過疎を生んだ。人手を失った山村は、林業不況も重なって山が荒れている。

悪いことに中国地方では、山のひとつのヒダのような沢にも、集落があり、クマの生活圏と住民の生活とが折り重なっている。

クマはカキやクリを好む。近年これらの果樹は食べる者もなく、切り倒せば全て解決するのだが、先祖伝来の果樹は切ることができない。廃村がクマを養っている、過疎の現実が鳥獣害の解決を難しくしている。

3 新しい土地で調査が始まる

一五台のドラムカン檻を山奥に設置し、捕獲を待たがなかなか捕まらなかった。

近隣の町村では有害駆除でかなりの数を殺していた。山奥にはいないのだろうか。

九月三〇日にオスのサターンが捕まった。大きい。広島のクマは秋田より大きい。暖かくて越冬期間が短く、それだけ食い込みが多いので、大きくなるのだろうか。続いて十月十一日にオスのタイタンが捕まった。この二頭は山奥で捕まり、里には近寄らないクマだった。山奥で行動し、越冬地点は天然広葉樹

の中で、生態は秋田でのクマと同じだった。

一年目の調査では、生息状況の把握に努めたが、奥山に生息が少なく、集落周辺に多いという、生息のドーナツ化現象が分かった。

捕獲以降、二頭の現在位置を各関係町村に月報として報告し続けた。このことが町村担当者にも、クマも追跡でき、現在位置を知る方法があるという認識へつながったと思う。

二年目のテーマは、生息数が少ないのに、毎年被害がひどく、有害駆除捕殺が多い悪循環をどこかで断ち切る必要があった。それが「奥地放獣」策だ。町村が檻で捕獲したクマをもらい受け、発信機付きの首輪を装着し、放獣の際にクマ防獣スプレーを吹きかけ人里にたいして恐怖感を持たせる方法だ。奥山移動法は一九八二年に秋田で二頭のクマ経験があった。なぜ奥地放獣が必要なのか。

西中国のように果樹、飼料、残飯などを飽食しているクマの行動圏は狭い。特にメスグマのそれは狭い。こうなると広島、島根と互いに交流があるか、山奥にクマが増えて行くだけの数が生息しているかが問題だ。

一年を通して里近くで活動しているようだと一年を通じて被害が継続し、被害→捕殺の図式が将来とも続き、絶滅へ向かうからだ。

九〇年に広島県で捕まえた二頭のオスグマは奥山行動型だったが、九一年に集落周辺で捕まった三頭の行動は違った。

広NO. 3のメスグマのジェシカは山間地の集落のカキや人家に巣くったニホンミツバチを渡り歩いた。越冬地点は捕獲地から五〇メートルだった。秋の捕獲地点が越冬地点と近いことは、周囲の環境（この場合は集落）依存が強いことを意味し被害が周年継続する。

ジェシカは私が住んでいた廃校のある集落周辺に、いつもいた。夕方、車の前を走り、散歩すると姿を現した。広島の人達と宿の二階から、炬燵に入り、観察をしたものだ。ジェシカは現在まで、捕獲地点を中心に行動し「食」「住」を集落に依存する完全な集落依存型のクマだった。ジェシカは将来に渡って集落に被害を与え続けるだろう。

一方、広NO. 4のオスグマのタイフーンは町内の各地の集落を渡り歩き、カキを食べ続け、最後は捕獲地点から四キロ離れた山の奥地で急な崖の中腹で越冬した。これ以後、タイフーンは「食」「住」は集落に依存し、「住」は山奥に移動する中間型のクマだった。

九一年は西中国各地でクマの出没が多く、各町村で多くのクマが殺されていた。有害駆除に替わる、なにか違う方法を模索した。

この年は西中国ではカキが豊作で、甘実を求めて集落周辺に多くのクマが出没して、有害駆除で殺されていた。しかし殺すだけではこの根深いクマ害の問題は解決しない、一度だけはゆるそうと考えた町があった。

奥地に移動した五頭の内の一頭だけでも山奥に残ってくれたらそれだけ繁殖の可能性が高くなる。それまではどの町でも、捕まったクマは全部有害だとして殺していたのだ。

十一月二八日、町が殺すことを目的で捕まえたクマを、殺さずに山奥に返し追跡調査を行なうことになった。これを行なうことは大いに勇気があることだった。なにしろ生きたクマを再び野に返すのだから。

それが五頭目のザンパンと名付けたオスグマだった。この記念すべきクマは、集落にもどることなく間もなく越冬に入った。

その後、春になり九二年の五月には集落近

くにもどって来たが、被害を与えなかった。

しかし、ザンパンは十月六日に隣町で有害駆除で殺されてしまった。その時右前足が無く、イノシシを捕るワイヤーのワナにかかって前足が腐って落ちていたようだ。

三年目までにこの奥地放獣法が一村、四町と広がり、主要生息地はカバーされた。現在広島県では原則的に有害捕獲個体は原則奥地放獣になり、今年中に島根、山口県もこの方式となる予定だ。これにより、放獣個体による再被害が激減した。

九四年末までの追跡による判定では延べ頭数（頭数×年数の合計）は八八頭となり、軽微な再被害を与えたものは二頭だった。

九二年秋に、西中国山地の、クマの生態と被害状況を知ってもらうと全国クマ専門家会議の「第二回 コロキユウム 日本のクマ」と、一般を対象にした「クマフォーラム'92」を開催した。これを期に、人々のクマに対する意識も変わってきたように思う。

九二年十一月一日、セスナロケーションを行ない、追っているクマ達の位置を地図に落として行くと、クマ達には町村の境界や県境などは無く、行政の境界を越えた取り組みの必要性を感じたものだ。お互いに奥地放獣したクマは行き来することを認めあうことが必要になる。難しいことを進めるには痛み、苦しみを分かち合う必要があるのだ。

広域行動の例をいくつか上げる。基礎調査分としてオスグマのシリウスを、奥地放獣分としてチャーリーの行動を上げる。

シリウスは、県境を越え多くの町村を渡り歩くオスグマの典型だった。九二年の秋に吉和村で捕まえ、島根県の匹見町を経て、戸河内町、芸北町、島根県の金城町、弥栄村まで

行き、越冬時期になるとその逆をたどって吉和村にもどってきた。捕獲地点から最遠点は二九キロとなり、秋田での最遠距離を記録したゴンの二一キロより遠くへ行った。

その後も同じような行動が続くが越冬地点は吉和村の山中の一キロ以内で落ち着く。

若いオスグマのチャーリーは九四年夏に戸河内町で捕獲され、放獣された。ところが約一〇日間で鳥根県の日原町まで移動し、捕獲、射殺された。この間は四一キロある。

これは、これまで経験した最高移動距離である。この例は、若いクマの移動分散様式の一端を表していると思われる。

メスグマは多くの町村を渡り歩く例は少ない。メスグマは定着性が強く、越冬する十二月までには放獣地域より捕獲された集落周辺までもどってきた。その時にはもうカキもクリも実がなっていないのだが。

四年目の九三年になると広島県は「ツキノワグマ保護管理計画」の策定に入り保護の流れが決定的となった。内容の大きな柱は A 広葉樹の復活及び生息地の買い上げ(三箇所五七〇ヘクタール) B 有害駆除で捕獲されたクマは原則として奥地放獣 C 狩猟の禁止(環境庁・九四年より西日本) D クマの生態の啓発普及 E 被害防除法の研究などが骨子となっている。

広島県・鳥根県においてテレメトリー調査・奥地放獣犬記号放逐した全個体の再被害判定表等

Table with columns for NO, 性別, 年度, 捕獲地, 調査, 有害, 条件付, 奥地, 回帰, 行動型, 越冬形態, 被害・再被害の有無 (90-94).

- 1) 町村単位の奥地放獣のため、捕獲地点と放獣地点が近く回帰の判定は困難
2) 広13はモモ、クリ園に被害を与えていたが電気柵を設置したために再被害がなくなった
3) 吉和一本町 戸河内一本町 直井一本町 長井一本町 匹見一本町 湯来一本町
4) 調査一環実行調査 有害一町村による有害駆除 条件付一スプレーによる条件付放獣一奥地放獣 回帰一捕獲地への回帰
5) 再被害の有無は町村担当者で調査者で判定する。集落に接近、被害が見られなかったものを言う。
* 首輪装着放逐後行方不明となり、あるいは入れ墨等装着で再被害無となっている場合は、有害で捕獲・射殺等が無かったための判定となる
6) 有害駆除措置がとられた場合は再被害ありと判定する
7) 回帰上発見された、カキ、クリ等の食害は被害軽微とする
7) 「行方不明」は放獣後行方不明となったもの。なにかの事故にあった可能性もある

が可能となったのだ。これまで各種の被害防除法の研究と、実証試験を行なった。その結果、樹幹のトタン囲い、電気柵の効果は確実だ。センサー(侵入感知機)と連動させた犬の鳴き声、超音波、爆竹発火、クマスプレー噴射も効果があった。一方、定期的に鳴らす爆竹機、鳴き声は慣れて効果がなかった。

奥地放獣策は当初から問題点もあった。西中国の生息数三〇〇頭の一割以上が首輪付きとなったら、自然個体群とは言いにくい。そのため、五年目の九四年は首輪を装着し

山と博物館 第40巻 第9号
発行所 長野県大町市 TEL: 〇二一-
印刷所 大町山岳博物館
定価 年額一、五〇〇円(送料共(切手不可))
郵便振替口座番号 〇五四一七一一三三五

自動噴射して、これらは怖いと学習させる「クマダメージポイント」のような地点を山中に設置して学習させていきたい。被害救済をどうするのか、森をどうするか提案するのは研究者の責任だ。この五年間西中国で四六頭(再捕獲を除く実数)を捕獲し、内三四頭をテレメトリー追跡して分かったことは、山口、鳥根、広島県のクマは互いに深い関係を持っていった。同じクマが多くいる町村で目撃されているようだ。やはり西中国山地は一体として捉え、三県が同時に保護に取り組んでいく必要がある。そのため九四年から環境庁は三県の調整に入り、国段階として「西中国山地ツキノワグマ対策協議会」が持たれている。今後順次、紀伊半島部会、四国部会と進行して行くことになった。

環境庁では今年から体制の整った広島県に一六〇〇万円を投入し、更に大掛かりな実証試験を開始した。法人組織のツキノワグマ研究所設立の機運も盛り上がって来ている。

山口、鳥根県も広島県と同様の管理計画が進み、今年から施行される事になった。四国の生息地の徳島、高知、愛媛県についても県主体で「四国山地ツキノワグマ対策協議会」が持たれるようになった。(広島クマ調査所)